

## Topics 「大岡信ことば館」

# 「祝祭空間」閉館惜しむ

## 多彩な業績 伝え続けた8年

今年4月に86歳で亡くなった詩人・評論家の大岡信さんの多元的な業績を視覚や聴覚に訴える展示によって再現してきた

「大岡信ことば館」(静岡県三島市)が26日、2

「ことば館」は、09年

カ月余の追悼特別展を終え、惜しまれつつ2009年秋以来8年間の歴史に終止符を打った。



①大岡信さんの詩と柿田川湧水群(静岡県清水町)の映像を組み合わせた「追悼特別展」の展示と岩本圭司さん—大岡信ことば館で17日、井上卓彰撮影 ②大岡信さんの詩編「地名論」を具現化した展示(2010年)—岩本圭司さん撮影



2月に大岡さんの出身地、富士山の伏流水で知られる三島市に完成した増進会出版社の「Z会文芸教町ビル」1、2階部分(計約1050平方メートル)を展示室とし、同社の運営・管理の下でスタート。11年にかけて行われた開館記念特別展(全6

期)を皮切りに、大岡さんの詩のオブジェ化をはじめ、作品の生原稿や創作ノート、美術品のコレクションなどの展示を通じて、膨大な仕事の全容を紹介し続けてきた。

設立準備の段階から大岡さんの詩や言葉を具現化する空間造形に取り組み、同館館長を務めた造形作家の岩本圭司さん(61)は「言葉を駆使した大岡さんの仕事は文学にとどまらず、美術や音楽、舞踊などの身体表現にも及んでいました。だからこそ、文学館や美術館といった枠にとらわれず、どこにもない『ことば館』に育てたいとの思いでした」と振り返る。

07年に組織された準備委員会では当初、1辺20メートルもあるメインの展示スペースの活用方法について、なかなか結論を

出せなかったという。岩本さんが準備委員メンバーの勧めで展示内容の試作を重ね、布やプラスチックフォームを活用し、光や音を加えて詩の言葉の世界を再現する独特の手法が生み出された。

岩本さんは「大岡さんは古典から現代まで俯瞰した上、眼前にあるものを言葉に転換する天才でした。その言葉をもう一度、目に見える形に転換し、言葉自身が持つパワーをより広げて提示したい。そう考えてやってきました」と語る。

他に類を見ない「ことば館」の展示に対し、大岡さんの盟友、詩人の谷川俊太郎さん(85)は09年のオープニングセレモニーで「言葉の祝祭空間が生まれた」と表現した。大

岡さん自身は開館前後から体調を崩してしまっていたが、自らの詩をモチーフにした空間造形の展示に触れるたびにおもしろがってくれたという。閉館を知ったある関係者は「残念だ。言葉を転換してくれる場所が無くなってしまおう」と惜しんだ。岩本さんは「自分がやろうとしてきたことを理解してもらえたのだと思います」と振り返った。

「ことば館」所蔵の著書・原稿・美術品などの遺品類は、大岡さんが長く教鞭をとった明治大に寄贈され、20年までに開設予定の「大岡信文庫(仮称)」に集結される。増進会出版社の協力により、今後も明治大公開講座(座りバティアカデミー)などの場で業績の研究・公開が続けられる。

【井上卓彰】